物象化する世界から変容する像

香 田 芳 樹

もうずいぶん前から片付かない問題がある。中高ドイツ語の Bild の意味するものが何かという問題である。修士課程の二年 生になって, そろそろ修論の準備を始めようとした頃, 名古屋 大学の伊東泰治先生に勧められて学会で発表することになっ た。当時(今を去ること20年近く前)は研究発表会は大家の先 生方のためのもので、大学院生が発表するなど畏れ多い時代 だった。そうした雰囲気に抗して、若い研究者の卵にも発言の 機会を与え育成を図ろうという意図から理事会企画として会場 が設けられることになった。ここで修論の概要を発表しては、 と勧められたのである。修論にはドイツ神秘思想、特にマイス ター・エックハルトを扱おうと決めていたが、それからがどう にも続かず、内外の文献を出鱈目に読み漁っている状態であっ た。各方面の碩学を前に自説を披露するどころではなく途方に 暮れていたとき、指導教授の金子直一先生が、エックハルトの bilden の用法について調べてみてはどうか、というヒントを与 えて下さった。不勉強な初学者のくせに、このテーマの重要性 だけは即座に理解できた。神と人間の神秘的合一が神秘思想の 根本問題であるとすれば、神がなぜ人間を似姿として「造り」、 また人間が神に向かってどのように自己「形成」するかが神秘 家の主たる関心でないはずはない。こうして、神が人間を造る 行為 (bilden) と神の姿 (Bild) との強い結びつきを解明しよう とエックハルトのドイツ語著作を調査し始めた。

Grimm の辞書の Bild や bilden の項を見てみると、これらがいかに広範な意味を歴史的に獲得していったかがわかる。Grimm によれば Bild とは本来「形造り、型取り、捏ね、くり抜き、彫り、切り、鋳造することでもたらされた作品」で、「す

でにあった或る別のものに従って造られたものであり、それに は原像の面影が残っている | とある。彫像であれ絵画であれ、 造られたものはすべてその原像の写しであり、自立完結した像 といったものはない。このことを神学的に言えば、原像と像の 間にあるのは類比的 (analogice) 関係で、同音異義的 (univoce) な生成とは別ということになる。神は自らに似せて人間を浩っ たが、これは神が産んだ実子イエスとは違う。像はあくまで模 **做物であり、それ自体に生命はない。しかしその反面、優れた** 芸術作品に精神が宿り、実物とは別種の現実性を得るように、 像も同一でないにせよ、その造られた行為に対してもつ存在価 値は否定されないはずである。それが bilden という行為を前提 にした Bild の意義なのではないだろうか。エックハルトは、像 に原像の生命を与えるのが魂(精神)の最高の力であるとい う。「魂の最高の力とは、その本性も作用もいかなる肉とも混 じらず、魂の空にあり、時間・空間への期待・嗜好をもったあ らゆるものから離脱し、いかなるものとも共通のものをもたな いので、神の中で人は神の姿に倣って造られ (in gote und nâch gote gebildet), 神の一族・血族なのである」(『神の慰めの 書』)。人間は神学的には被造物 (Kreatur, Geschöpf) であるが、 エックハルトはこれを造られた (geschaffen) ものとは呼ばず、 形成された (gebildet) ものと名づけ、産まれた (geboren) も のに限りなく近いものと見る。造り物には生命はないが、範型 にそって形成されたものは変容を繰り返し、姿を変え、最高者 に近づく。「この(魂の)力は自分自身の姿を脱し (entbildet). 神の中へと姿を変え(iiberbildet). 神の中で神から生まれなけ ればならない | (同書)。神に形成されたものがその像の動因に よって原像に引き寄せられる様をエックハルトは entbilden ûzbilden - überbilden-înbildenという動詞群によって表現してい る。像が内蔵する動因が知性であり、これがこの世の時空から 離脱し「空」となることで、最終的に人間の姿が神の原像と姿 を合わせる (überbilden) のである。

私の初めての研究発表は Bild や bilden が神と人との本質的な 繋がりを表す概念であることと、それゆえエックハルトに対す る異端疑惑にも関係することを述べて終わった。しかしこの像 をめぐる問題は、その後研究を進める中で私の頭を離れること はなかった。ゾイゼ、タウラーといったエックハルトの弟子た ちが師の問題提起をどのように受けとめたか、また女性神秘思 想家たちが無機的な像をどのようにして生身の「肉」として理 解しようと奮闘したか、「姿|「像|「形成|をめぐる疑問は答 えを与えないまま私に楽しい熟考の時を与えてくれた。今回日 本ゲーテ協会の交流誌に短文を書かせていただくことになり, 再びこのテーマを取り上げたのは、「原型」や「メタモル フォーゼーを自然学の中心に捉えたゲーテの思想にもこうした 「形成」をめぐる問題が痕跡を残しているのではないかと感じ るからである。もとよりゲーテ研究者でもない私には自然観察 の大家について述べる資格はない。しかし、ワイマールとエル フルトという地理的にさほど離れていない空間で、500年の時 をおいて二人のドイツ精神史の巨人が同じ「形成」について思 素を巡らしたことは興味深い。以下では古代から中世にいたる Bild と bilden をめぐる思索の一部を粗描し、これらがゲーテの 自然学にまで射程を延ばしうるのか専門家の方々のご意見を賜 りたいと思う次第である。

「像」「形成」に関する洞察は神秘家たちの独創ではなく、思想史の二つの源流に遡ることができる。一つは新約聖書におけるパウロの「人間の革新 (reform)」の思想である。神は「前もって知っていた者たち」を「御子の姿に似たものにしようと (conformes fieri imaginis Filii eius)」(ウルガタ訳、ロマ8:29) 定めた。彼らがイエスに倣って生きるとは、「この世に姿を合わせるのではなく、あなたがたの心を新たにして姿を変える (nolite conformari huic saeclo sed reformamini in novitate sensus vestri)」(同12:2) ことなのである。姿 (forma) を変容し革新することが、パウロの言う「滅びに向かう古い人」を脱ぎ捨

て、「神にかたどって造られた新しい人を身に着ける(induite novum hominem qui secundum Deum creatus est) | (エフェソ 4:24) ことである。ドイツ神秘思想がパウロ的「変容」から 多くを学んだことは間違いない。その際注意すべきはパウロの 似姿論には二つの側面があることである。このことは、エック ハルトの Bild が上述の「イエスを身に着け」たり、「像を鋳造し したりする彫塑的イメージに基づくのに対し、ゾイゼは第二コ リント書(3:18)にある「主の栄光を映す鏡」の中で同じ姿 へと変容する映像的なイメージで Bild を捉えることが多いこと に現れている。後者の場合結ばれる像は、前者の「似ている・ 似ていない」という単純な相似性を越えて、動的・可変的な釣 り合い (proportio) によるといえよう。H. Stirnimann はこのこ とを「Bild はシンボルに近く、Gleichnis はアナロギアに近い」 と表現している。二つの似姿があることは盛期スコラ学の泰斗 トマス・アクィナスもしばしば言及し、imago を「自然におけ る同塑的類似 | それに対して similitudo を「代表的類似 | と読 んで区別している。こうしたことは例えばカッシーラーの象徴 論における「代替機能」と「代表機能」と符合しているのでは ないだろうか。

さてパウロの μεταμορφωσιςが中世キリスト教神秘思想の像概念の一つの支柱となったとすれば、もう一本の支柱はイスラム哲学を通してヨーロッパに逆輸入されたアリストテレスの認識論である。周知の通りアリストテレスによれば、「真理とは認識するものと認識されるものの一致」(『霊魂論』第3巻2章)であるが、スコラ学者はこの異教の哲学者の定義に、キリスト教の似姿論を正当化するものを見つけた。加えてこれは、神の完全な認識が神と人の合一を可能にするという確信を神秘家にも与えた。こうして神のロゴスとしてのイエスの意味が救済史的にだけではなく、認識論的にも正当化される。認識を媒介する像はスコラ哲学ではimago(像)、species(種)、exemplar(範型)と様々な(そして煩雑で混乱を招きやすい)呼称を

得て論究されるが、意味するところは現代語の「概念」に近 い。トマス・アクィナスは言う。「われわれの知性は自分自身 を認識する。これは能動知性の光を通して感覚物から引き出さ れた物によって (per species a sensibilibus abstractas) なされ る」(『神学大全』)。自己を認識できるのは知性だけであり、 これが可能なのは知性が対象(自己)から像を抽象できるから である、という論は中世哲学には一般的であったが、これに 真っ向から対立したのが思弁神秘思想である。それによれば、 対象の完全な認識は間接的媒体を排した「直観 (angesiht âne mittel) | によってのみ可能であり、その意味で像によらない自 己認識こそが主客の対立のない純粋認識である。「もし見えな いものを見ようとしても、見えるものの像以外いかなるものも 見えてこない。形のないものを直観しようとしても、形のある ものの形象を夢見るに過ぎない。何故なのだろうか。[…]形 象によって思考するのは、まだ純粋知性によって見ようとはし ていないからである | (サン=ヴィクトルのリカルドゥス De preparatione animi …)。エックハルトが「天使の認識」と呼ぶ この純粋認識は分析的ではなく、存在論的である。「神が被造 物を見れば、神はこれに存在を与える。被造物が神を見れば、 それは存在を得る。魂は知性認識存在である。神のいるとこ ろ, 魂もある。魂のあるところ, 神もいる」(マイスター・ エックハルト『第10説教』)。「私が目を開けば、それは目であ る。目を閉じても、同じ目である。見ることで樹から何か減っ たり増えたりはしない。[…] しかし、もし私の目がそれ自体 において一にして単になり、開かれ、樹に向けられると、各々 はそのままでありつつも、視覚の働きの中で一つになる。これ は目樹といってよいものである。樹は私の目なのだ」(『第46説 教』)。存在を直接体験しようとする認識は逆説的に像の排除へ と. 認識行為自体の否定へと向かう。

「形成」概念をめぐってのスコラ学者と神秘家の間での論戦 はつまるところ「像」の可否をめぐる攻防であったといえるだ ろう。範となる像を否定すれば神学は必然的に汎神論になるし かなかったからである。こうしてみると bilden についての教説 でエックハルトが異端者として断罪されたのは当然の成り行き だったといえよう。14世紀の教皇勅令で、像なき「至福直観 (visio beatifica) | の可能性が天上に延期され、この世ではもっ ぱら像による認識だけが許可されるようになると、像は原像を 志向するダイナミズムを失い, 絶対者の影としての地位に甘ん じるしかなくなる。それは科学の世界では普遍物から抽出され た概念となり、思考のための有効な道具たるべく自己の内実を 硬化させていく。14世紀にフランシスコ会士リンダウのマルク ヴァルトの記した科学批判に次のような一節がある。「第三の 学校はアリストテレスやプラトンの異教の知恵を教える場所で ある。この学校では七学芸が講じられ、どうすれば効果的な話 術を駆使できるか、どうすれば距離や奥行きを計測できるか、 どのように天体の運行を知るか、能動知性と科学理論を駆使し てすべてのものごとを調べ上げ、個物から一つの概念 (ain bild) を引き出し、事物の特性や本性と秩序を知る術が教えら れる。概念をたくさん身につければつけるほど、知恵があるこ とになる。[…] ここでは自然学の教師たちや神を気取るたく さんの人たちが教えているのだが、自分たちは聖霊の学校にい ると豪語して憚らない」(『第30説教』)。マルクヴァルトは、 より明解な Bilder をより多く集めることで世界をよりよく理解 できると思い込んでいる学者たちの愚かさを揶揄し、キリスト に従ってこの世を忌み、彼と十字架の苦難を共有する術を説 く。彼が批判するのはいわば物象化した像の世界、原像を求め て自己変容するエネルギーを失った像の世界である。世界が絶 対者への志向を失う過程と、像が象徴機能を失い物象化する過 程とは連動している。ドイツ神秘思想であれデヴォチオ・モデ ルナであれ、中世後期に生じた新しい宗教性への機運はすべ て、硬直化していく自己と普遍者との関係を革新しようという 試みだったと言ってよいだろう。そして、18/19世紀にゲーテ

が近代自然科学の概念性と数量化に異議を唱え、原型と個体との関係から植物界、動物界、天体を解釈し直そうとしたことに、こうした問題意識の変形と延長を見るのはうがった見解であろうか。私には、精神の物象化に抗い、自己を絶えざる変容の中におこうとした13/14世紀の宗教的アウトサイダーたちの反骨精神がそこにもまだ生きているような気がするのである。

(大東文化大学講師)